

卒業論文要旨

東京の紙・パルプ工業の実態

居波芳江

東京の紙・パルプ工業を全般的にみたとき、紙製容器製造などの加工分野の発達が著しく、紙製造のウエイトは決して高くない。しかし、人口過密の都内において、用水型・装置型の製紙工場が現存しているというのは興味深い事実である。

環境問題等から厳しい法的規制のもとに操業を続ける都内の大工場であるが、紙製造についても、設備投資の半分以上が公害対策費として使用されるという。このほかにも、交通問題等デメリットがあるが、それらに負けない立地要因を現存する東京の製紙工場はもっているはずである。消極的な残存という見方からは、①創業の古さから、既得の敷地や取水権を都内にもつが、今からこの代替地を得ることは不可能であり、②大型設備の移転費用と従業員の生活問題などから移転が困難なことが考えられるが、積極的な要因としては、①消費地に近ければ、需要者の要求にあった紙質・規格の紙の供給に都合がよいこと、②都市で回収された古紙が、製紙原料となることなどがあげられる。

古紙については、木材資源不足の深刻化から、製紙原料中に占める割合を年々拡大しているが、発生源としては大消費地である東京が最大であることはいうまでもない。紙の中でも古紙を主原料とするのは板紙で、板紙の製法も紙の製法もほとんど変わらないが、板紙では白色であることが必ずしも求められないため、漂白過程が省略され、製造に必要とされるエネルギーや用水は、紙の場合に比べてかなり小さくなっている。このようなことから、都内の紙製造については紙よりも板紙が中心となってきている。

さて、都内の紙・パルプ工業を従業者数からみても工場数からみても、8割方構成している紙製

容器製造業は、板紙を材料に最終商品となる紙器をつくりだす加工業である。紙器工業の実態は、紙製造が大型装置によって合理的な生産をおこなっているのとは対照的に、強い零細性や遅れた企業体質などを特徴としており、最新の機械導入もみられるものの、依然として手作業を主体としている。このような紙器工業は、零細性を特徴とする都会型工業の代表的なものと考えられるが、紙器工業の零細性を必然的に強めるいくつかの要因が、調査の結果うかびあがってきた。①もともと家内工業的に発生し、小資本で独立した企業が数多くあり、工場数がたいへん多い、②多品種少量生産のため規模の利益をあまりうけない、③敷地が狭く、工場拡大が困難、④下請的な受注生産ばかりを行っているため、需要拡大の見通しがつきにくく、先行投資をして規模拡大をはかるよりは外注に依存した方が無難、⑤相互に外注に依存しあう傾向が強く、そのため不十分な設備しかもたずに独立した企業の存続も可能、⑥企業体質の遅れ、労働条件がととのっていないことなどから、若年労働力が集まらず、成長性を欠いている、⑦設備投資が計画的におこなわれていないために、人件費の上昇ほど生産性は伸びず、人件費の縮小を人員カットでおこなうため、ますます零細化する、などである。

紙器工業も、段ボール箱製造、印刷箱製造、簡易箱製造、貼箱製造とさらに分れ、それぞれの用途と結びついた特徴をしめすが、紙器の用途をさぐることで地域の地場産業が明らかにされるようである。玩具のための印刷箱製造が盛んな台東区・葛飾区、電気器具のための段ボール箱製造が盛んな目黒区・品川区・大田区などがめだつた。